

## 2 子供が母親や身近かな大人ら離れる

## ことをめぐって

## 1. はじめに

幼児期を過す子供がはじめて集団の中に入る時、あるいははじめての場所や人に出会うと母親から離れないことがよくある。その時の母親は困った表情をして「なかなか離れなくて困ります」と訴え、せうかく来たのだから一人で遊んでほしいと願う。また保育者の方も早く母親と離れて集団に慣れてほしいと思う。多くの場合新しい環境に慣れさせる必要があるという大人側の考えが先行し母親と子供を直ちに切り離すことが多いように思われる。しかし、大人側が子供に対して強く母親と離れることを願えば願うほど母親と離れにくくなり、強制的に離すことが多くなれば、激しく泣いた後例えその時母親と離れても、もう一人で動けてもいい時期まで母親を要求しつづけることがある。

そこで子供が母親から離れることをめぐり、私が直接係っている知恵遅れの子供達の保育場面や相談室での子供とのつき合い等の事例を通して考えてみたい。

## 2. 子供は母親から早く離れなければならないと考え

がちになる子供のまわりにいる大人達  
母親…他の子供は楽しそうに遊んでいるのに、またせうかく集団の中での生活をさせようと入れたのだがうまくいかない焦り、つまり、何が出来るか出来ないかということが子供の評価につながる風潮のある昨今、自律を養うとか、何か出来るようになる事にと母親は子供の為に一生懸命考えている。ところが自分（母親）から子供が離れないことは評価対象以前の事として扱われてしまい、母親自身が他者からの評価を恐れて一時も早く離れることを望む。

## 一事例Ⅰ-

子供の泣き声がするのでその方をみると、先生が子供を慰めて部屋に連れていこうとしている。隣で母親も一見やさしく励ましているようだが、先生が子供に語りかけている時母親は瞬時まわりを見まわしたり眉間に皺をよせて今にも勘忍袋の緒が切れそうな顔をしている。先生の子供に対する語りかけに少し間があると母親はとたんに表情を変えやさしく再び慰めにかかる、そんな

な様子がしばらく続く。

園児が帰る時間に子供の泣き声がするので目を向けるとその子供が母親に叱られている。「あしたはちゃんと一人でお部屋に入るのでよ、恥しいですよ、もうお兄いちゃんになるのに、わかったの、泣いていたら判らないでしょ、お返事は、恥しいのは母親であろうし、わからなくて納得できないから泣いているのにならなかつた？ときいてもはじまらない。

保育者…その子供だけに手がどられてしまったり、他の子供とは違う扱いをする大変さもあるが、一日も早く集団に慣れてほしいという願いもある。また集団がスムーズに動かせないとしながらも早く離れることを望む。

## 一事例Ⅱ-

I(4歳) 幼稚園に入ったがお母さんと離れたがらない。先生も母親も困ってしまう、うまく先生の誘いによって遊び出すこともあるがその時は先生のあとばかり追ってしまう。そのうち先生から、おうちでもっと眠るよようにといわれてしまう。

多くの場合、集団生活をはじめる子供は母親から離れなければならないとし、そういうものであるということで見やさしく母親や保育者は子供に対応しているが、結局はなんとかして母親と子供を離すことだけに一生懸命になっていることが多い、それだから母親と離れにくい子供は一種の問題児として考えられたり扱われたりしやすい。

## 3. 子供が母親から離れにくい様子

## 一事例Ⅲ-

A(3歳) は母親のスカートの裾を握って少しも離れようとしない、例え離れたといっても母親のスカートから手を離したということだけであった。数日すると母親の存在を気にしながらも以前よりは母親から離れてそばにある玩具で遊び出す。私は母親にその場を離れずにいるように頼む。Aは日ごとに行動範囲が広がっていく。しかしAは必ず母親の見える場所までしか行かない。ある時、母親との距離は近いが壁の裏手でAは遊び始めた。私はもう母親が見えない所でも遊べるようになったのかと心の中で喜んだ。一方母親は子供に気付かないう

ちに抜き足し差し足で退去しはじめ私が気付いた時はすでに部屋の外に出かかっていた。Aは、そのことには気付いてはいなかったようだったが、突然今まで動きを休め母親の方へ足を向けた。壁の表に出たとたん母親のいないのを見て急に激しく泣きだした、Aはそれから数日母親から全く離れず遊ぼうともしなかった。

#### 一事例Ⅳ-

いつもは母親と離れて遊ぶことが出来るB(4歳)である、ある時、来室時、母親はすぐまた出掛ける用事があるらしく、保育者に荷物でもあづけるかのように慌しくBを置き去る、とたんにBは泣き出し、しばらく続く。用事があるのならもう少し早く家を出るようにしてゆとりをもって子供と別れるようにしたらよいのと思う。

#### 一事例Ⅴ-

C(2.5歳) Cは入室時から母親のおなかの中に入っているかのようにして全くテストにならない。母親はしきりに「ほら面白いよやっごらん積木だよ、」スゴク高い、ママも好きよCちゃんやっごらん、等々、しかしそのように言えば言う程だんだんべそをかいていく。しまいには母親の方が語勢を強めて「ちゃんとしなさい約束でしょ、だめでしょ、私は母親に黙って気にしないように告げるが母親は今度は私の方に謝ってくる、Cは泣続けるだけであった。

#### 一事例Ⅵ-

母親と手をつなぎ笑いながら入室してきたD(3歳)であった。入室するなり母親が突然Dをポンと抱き上げ私も驚くばかりの早さで椅子にすわらせてしまった。すると急にDは激しく泣き出し席を立ち母親の方へ行き顔を母親の膝の上にならずめてしまった。その後も終始母親にくっついてテストには応じなかった。

子供が母親から本当に一人で動けるようになる前に、母親のそばでまわりを見回したり、興味を示そうとする動きや実際に母親から離れて興味のある物を捜しに行くことが十分に出来るまで待つことが出来ない母親。子供を荷物のように扱う母親。一見子供に対して優しく励ましているような対応その実、何とかして自分(母親)から離そうとして母親が持ち合わせている励ましに関するポキャブラリーのすべてを速射砲のように発する母親。

子供がどんな気持ちであろうとどんな状態であろうと、母親の子供を離すという気持ちだけが優先していく。子供自らの意志気持ちは全く尊重されていない。つまり、好奇心を動かされたり、興味を向けてみたり、またそういうことによつて子供自ら動くということを全くさせられずに大人(特に母親)によつて子供達は動かさ

れてしまっている。

#### 4. 子供が母親から離れていく様子

##### 一事例Ⅶ-

S(3歳) 入園して母親となかなか離れない、私や他の保育者は何とか気持ちよく母親から離れて楽しむことが出来ればと玩具で誘ってみたり、Sの好きそうな物を捜してみせるが、こちら側の意図は凡て意に介さないように母親にくっついている。しばらくこれまでのSの様子を母親と話している。するとSは母親から離れて動き出した。すると母親はスキをみて退室してしまった。案の上Sは激しく泣き出してしまふ。母親がその泣き声をきいて再び入室する。するとすぐ泣きやんだが母親からSは離れようとしなない。私達保育者の方はもういつまでも母親のそばにいていいというつもりでしばらく過すことにした。Sは教日はほとんど母親のそばから離れないが、視線は母親にほとんど向けられていた当初から次第に自分のまわりの子供達の動きを追ったり、他児が遊んでいる玩具を追っている。時に遠くからの保育者の呼びかけに顔を向けたり、他児の遊んでいる玩具の動きに微笑をもって目で追ったりしながら母親から手を離す。しかし保育者がSのそばにいて誘おうとよっていくととたんに母親にくっついてしまふ。

その後一日母親にくっついているものの、ほとんど母親の方に視線を向けずに、自分のまわりの物に目を向けるようになると、どんどん母親から手を離れる回数が増えてくる。そして母親に「アノオモチャ、」というように許える。(言語的ではなく動作的に)母親は簡単に励まして取りに行くよう励めるがSは母親のそばから離れない。ある時Sが母親から少しだけ離れて、自分がほしい玩具をとってすぐ母親の所に戻った。私は遠目に見ていて母親の所にすぐに戻ったものの自分から要求するものを自ら取りに行くことが出来るようになったことを喜び拍手してSをほめた。すると母親もSの頭をなでて喜んであげていた。

Sは次第に母親との空間的距離が広がり母親と離れている時間も長くなってくる。ところがSにとって予期せぬ出来事(他児から遊んでいる玩具をとられたり、ころんだりした時)があると保育者がいくら慰めてもだめでやはり母親を必要とした。ところがその頃はもう母親を必要とする時間が短かくてすむ。

Sの動きはますます広がっていき、母親が見えない所までも出向き、長い時間過すことが出来るようになっていく。その時にも母親には一つの場所に止まっているようお願いした。Sの動きはついに母親がいなくても十分に一人で動けるようになり、あの頼りなかった以前の様子

とは打って変わってしまったのである。Sはその後、私達のグループに通いながら、自宅近くの保育園に通うようになるが、その入園時にはすぐ母親から離れて、他児に比べて出来ることは少ないけれど、Sなりに一人で動くことが出来たのである。

#### 一事例Ⅵ一

テスト室に母親に抱かれて入室したK(2歳)も、母親はなかなか離れなくてとこぼす。全く気にすることなく抱いたままで構まわれないことを母親につげ、二・三の玩具を机の上に出し、母親と私は家での様子を話し合う。するとKはチャッチャッと私の方をみては母親の胸に顔を埋める。再び顔をあげKは母親の手をとり机の上の嵌板をとれというような仕草をする。母親は軽く励ます。そして話をつづける。ところが私が母親と話しているうちに自ら母親の膝の上から降り机の前に来る。(母親と机の距離は1・2歩である)私がちょっとKの方をみるとすぐ玩具をいじりもせずまた母親の所へ戻ってしまった。なおも私と母親との話は続く。Kは私を見る時が多く、また見ている時間が長くなったり、玩具をみたり、外の景色をみたりして、母親の膝の上での動きが活発になってくる。私をみては玩具を見るというようなことを繰り返している。そのうち机の上の嵌板を一つ入れ急いで母親の許に戻る。私と母親は手を叩いて喜ぶ。すると母親の手をとり母親に嵌板を入れさせようとする。母親は再び励ますと自らもう一つ入れてすぐ戻る。再び私達は手を叩き喜ぶ。そしてついには机の上に出してあった嵌板全部入れてしまったので、再び私達は喜び、私はKの頭を撫てあげることが出来た。Kは私の方をはじめてゆっくりみて笑う。その後は今までが嘘のように、提示された玩具に対しKなりに対応して、その様子は母親も驚いていた。

以前は私は母親から子供を離す為はその子供に興味をもっていそうな玩具をみせて誘ったりしていたが、それでうまくいく場合もあったが、うまくいかない場合の方が多かった。

ところがいくつかの事例を通して母親から離れない子供を、母親から離す為ではなく、例え離れなくてもよいから、自分のまわりを見まわして興味を示すことが出来たり、何かを目で追ったりするようなわずかな動きでもいいから出来ればよいと考えるようになった。その様なわずかな動きでも自らの動きとしてだんだん広がってくれば結果的に母親と離れることが出来ると考えたからである。

#### 5. おわりに

一般的に子供は母親から離れた方がよい。また離れるべき、離せというようなパターンで、母親を含め大人は子供を何とかして早く離そうとして努力する。しかし子供を母親から離すことを一義的に考えて子供に対応してもうまくいかない。母親が子供の自律を考える余り、子供の気持ちに全く関係なく母親と切り離して過した為に言葉の発達が遅れてしまった例もある<sup>1)</sup>。

そこで、子供を母親から離すことを考えるというのではなく、まずは子供自ら探索行動<sup>2)</sup>をとることが出来るように大人が配慮することが大事ではないか。それには探索行動をとらせる為の子供に対する指示は全く必要ないであろう。むしろ母親は子供が離れないのならいつでも自分(母親)のところにいてもいいというくらい気持ちで子供を受け入れてみることである。また、保育者や母親以外の子供のそばにいる大人は、その大人自身が子供の使う玩具で遊びを楽しんだり、他児と動く楽しさを自ら感じる必要があるだろう。そこで生じてくるその楽しさの渦巻きは、だんだん一母親から離れない子供も含み、自然にその子供を探索行動に誘い込んでいくのである。

それから、例え母親との空間的距離が離れても、また母親の視界から見えなくなるくらいに子供が離れたとしても、しばらくはもとの位置に止まっていることが大事であろう。なぜなら、新しい場所や物、人に興味が出てきて自ら子供が動き出すことが出来ても、逆に子供にとって予期せぬ出来事や驚きが子供の不安を呼び起こし、突然母親の所に戻ってくることがあるからである。その時、母親のいないことに気付いてからの様子は、自ら離れて動きまわり何かに遭遇して不安になった時の様子とは比べものにならない程大きく、激しく泣いたりする上に、それが長く続くのである。

母親とは離れたが保育者とは離れ切れない子供に対しても同じことがいえそうである。

子供が母親や身近な大人と離れないでいる時は、まず大人側が基地<sup>3)</sup>としてまた家<sup>3)</sup>としての動きをとることに心をくばる必要があるであろう。

#### 6. 参考引用文献

1. 河合華雄 藤田 統 小嶋謙四郎 どう考えるか「母なるもの」1977年 二玄社
2. Bowlby, J. 1969 Attachment. The Hogarth Press. (黒田, 大羽, 岡田訳1976年, 母子関係の理論学 I 愛着行動 岩崎学術出版社)
3. 松沢孝博 保育者の動きの側面(I) 1974年 日本総合愛育研究所紀要